The Society for Ecocriticism Studies in Japan（SES-J）

エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No. 9　　Jun 1, 2025

http://www.ses-japan.org/

― 目　次 ―

エッセイ
「“Word of the Year 2024” と Thoreau―― “brain-rot” の浸透に抗して」.....1
「志賀直哉の『高畑サロン』――*Walden* の記憶」.....2
News & Information 3
編集後記 5

“Word of the Year 2024” と Thoreau――“brain-rot” の浸透に抗して

エ　ッ　セ　イ

塩田　弘（広島修道大学）

2024 年の年末、その年の文化的、社会的、または政治的な出来事やトレンドを反映する象徴的な言葉、“Word of the Year” が発表されました。主要な英語辞書を出版する各社が、それぞれ独自に選定して発表しており、ケンブリッジ大学出版は “manifest”、メリアム・ウェブスター社は “polarization”、ハーパーコリンズ社は “brat”といった単語を選定する中、オックスフォード大学出版局が選んだ 2024 年の単語は、「脳の腐敗」（brain-rot）で、それは現代社会における深刻な問題を浮き彫りにするものでした。「脳の腐敗」とは、SNS や動画コンテンツへの過度な接触が、集中力の低下や深い思考の阻害を引き起こすという現象であり、情報過多の環境が私たちの脳に与える悪影響を象徴的に表しています。この言葉は、医学的な正式用語ではないものの、SNS やインターネット上で共感を呼び、急速に広まりました。特に、青少年の知的成長を阻害する可能性が指摘され、社会全体での認識が進んでいます。

この問題は、社会のデジタル化によって生じた新たな課題のように見えますが、実は「脳の腐敗」という言葉は、19 世紀のアメリカの思想家、Henry David Thoreau が *Walden, or Life in the Woods.*（『ウォールデン―森の生活』1854）の “Conclusion”「おわりに」の章で初めて用いた言葉とされています。

> While England endeavors to cure the potato-rot, will not any endeavor to cure the brain-rot, which prevails so much more widely and fatally? (325)
> イギリスではジャガイモ疫病を解決しようと懸命になっているが、それよりはるかに広く蔓延して致命的な、脳の腐敗の方は直そうとはしないのだろうか?

Thoreau がこの引用の一行目で言及した “potato-rot”とは、当時のイギリスで深刻な問題となっ

た、植物に病害を引き起こす病原菌（Phytophthora infestans）による「ジャガイモ疫病（potato late blight）」を指しています。これは単なる地域的な農業被害にとどまらず、1845 年から 1852 年にかけてアイルランドでジャガイモ大飢饉（Irish Potato Famine）を引き起こし、推定で約 100 万人が死亡し、約 200 万人がアメリカやカナダ、オーストラリアなど海外に移住したとされる、世界の歴史に多大な影響を及ぼした出来事となっています。

「ジャガイモ疫病」以上に深刻な問題として Thoreau がとらえた「脳の腐敗」という現象は、思考の停滞や精神的な退化を意味していました。Thoreau は、産業革命による都市化や物質主義が人間の思考を浅薄にし、精神的な衰退を引き起こすと警告し、社会の喧騒から離れ、自然の中で静かに思索を深めることが人間の知的成長と精神的自由をもたらすと信じました。そしてマサチューセッツ州コンコードの森の中の、どの隣人からも一マイル離れた場所で小屋に一人で暮らし、およそ二年二ヶ月を過ごしました。その実践をまとめた本が *Walden* です。本書は、単なる個人的な体験記にとどまらず、普遍的な実践や哲学的メッセージを伝える本として、出版後 170 年たった現在でも広く読み継がれています。

一方で、Thoreau が生み出した用語である「脳の腐敗」は、現代においては当初の意味にとどまらず、複雑化した社会の中でより深刻な問題となり、情報過多による集中力の低下、深い思考の阻害、そして創造性の衰退などを含む、広義の意味で使われます。Thoreau が言及した「ジャガイモ疫病」のように、目に見えない形で襲い来る「脳の腐敗」が私たちの生活に深く浸透している今こそ、自然と触れ合うことや読書を通じ、内なる声に耳を傾け、深く自分自身と向き合うことが、現代社会を生きる私たちにとって、ますます重要な価値観となり、より良い未来への鍵となるのではないでしょうか。

引用文献

Thoreau, Henry David. *Walden*. Ed. J. Lyndon Shanley. Princeton UP, 2004.

志賀直哉の「高畑サロン」――*Walden* の記憶

真野　剛（海上保安大学校）

奈良市街地の東部、ちょうど春日大社の南に高畑という場所がある。かつては春日大社の神職が暮らす社家町として栄えた地で、自然の中にあって落ち着いた佇まいや静寂さに魅了された志賀直哉（1883-1971）は、1929 年にここに屋敷を構えて移り住んだ。宮城県石巻に生まれ、東京にて 88 歳で没するまで生涯 23 回の転居を繰り返した志賀であったが、9 年間をここで過ごした。多くの文化人や芸術家たちが、志賀が自ら設計を手掛けたこの和洋建築の邸宅に集うようになり、やがて「高畑サロン」と呼ばれるようになった。志賀が去った後に売却され、進駐軍による接収を経て、長年厚生省の保養施設として利用されていたが、1978 年に老朽化のため立て替え計画が浮上した。保存を求める声が上がる中、学校法人奈良学園が譲り受け、保全管理の下セミナーハウスとして利用するとともに一般に公開してきた。2009 年には、志賀が住んでいた当時の姿に戻すべく、一大プロジェクトとして大規模な復元修復工事が施された。現在、奈良県の有形文化財に指定されている。

この邸宅は 435 坪（1,437 ㎡）の広大な敷地に建つ 2 階建て数寄屋造りの木造建築で、中庭を取り囲むようにコの字型に建物が配置されている。書斎、茶室、寝室、客間など、15 ほどの部屋がある。外庭や池など多くの緑に囲まれており、どの部屋にいても室内には陽光がうららかに降り注ぐ。ダイニングは 20 畳と広々しており、長方形のテーブルとチェアーのセットが備えられ、さらに革製のソファーまで置かれていた。そして特筆すべきは、このダイニングから続くサンルームである。タイルが敷き詰められ、天井と外庭に面した大きな窓からより一層光が差し込むこの部屋で、谷崎潤一郎や小林多喜二といった白樺派の作家や親交のあった画家らと文化論、芸術論について言葉を重

志賀直哉旧居のサンルーム

ね、また時には将棋、麻雀、花札など遊戯に興じたという。呉谷は、このサンルーム「サロン」がダイニングといういわば日常生活を想起させる空間と繋がった構造となっている点を挙げながら、そこは志賀が追求した遊戯的と合理的という二つの側面がせめぎ合う場所であったと述べる（181-82）。

白樺派の中心の一人であった志賀はゲーテやトルストイらの思想に加えて、エマソンやソローの自然観からも強い影響を受けていたことはよく知られている。ソローの日本国内における受容に関して書誌研究としてまとめた上岡は、ソロー単独に向けた本格的な評価は明治期に内村鑑三によって始まったと述べているが（27）、ソローのもつ東洋性が日本人にとって馴染みやすかった一方で、却ってそれが目新しいものではなかったゆえに深い影響を与えてこなかったという点を指摘する（28）。若き日の志賀は内村の角筈聖書研究会に 7 年間通い続けた。やがて内村の元を去った志賀であったが、それでも師内村に対する敬慕の眼差しを忘れることはなかった（「内村鑑三先生の思い出」）。内村のキリスト教信仰や宗教観こそ受け継がなかったものの、一方で内村を通してソローの著作に触れ、自己との向き合い方や良心に従うことの大切さなど生きる上で多くのことを学んだ。藤田は、志賀が手帳に記したソローのワルデン（ウォールデン）の生活に触れた断片について、私生活で苦悩した志賀が「何よりも自ら貫こうとして挫折した、人間性を認める生き方に引き付けて受容されたもの」（5）ではないかと述べている。家族との葛藤に苦しんだ志賀は、ソローの言葉に勇気づけられ生への活路を見出したのではないだろうか。

奈良公園の神鹿

高畑での暮らしの中で志賀は 1937 年に、執筆開始から 17 年（構想段階を含むと約 25 年）にわたる歳月を費やして『暗夜行路』を書きあげた。短編、中編小説を主とした志賀が手掛けた唯一の長編小説であり、代表作の一つとしても知られるこの作品は、孤独や苦悩を経験しながら生き方を模索してきた主人公の心の安寧で締めくくられる。また今年、我孫子市の民家で新たな草稿も見つかっており、創作過程のさらなる解明が期待される。自己と向き合い、内面の誠実さを重視した志賀は、ソローの『ウォールデン』（*Walden*, 1854）と出会い、さら神の使いと言われる「神鹿」や静寂に包まれた高畑の自然の中で心象風景を紡ぎだした結果、この大著の完成へとたどり着いたのだろう。

引用・参考文献

上岡克己「日本におけるソロー受容史」、『ヘンリー・ソロー研究論集』第 31 号、2005 年、24-34 頁。

呉谷充利「志賀直哉の上高畑の『サロン』――生きられた日本の近代 1」、『相愛大学相愛女子短期大学研究論集』第 46 号、1999 年、153-83 頁。

藤田妙子「近代日本のエマソン、ソロー受容――内村鑑三、志賀直哉の自然観を中心に」、『ヘンリー・ソロー研究論集』第 39 号、2013 年、1-11 頁。

「奈良学園セミナーハウス――志賀直哉旧居」、https://www.naragakuen.jp/sgnoy/. Accessed 25 Apr. 2025.

News & Information

◇◆◇◆ 2025 年度大会情報 ◇◆◇◆

第 37 回 エコクリティシズム研究学会大会

日時：2025 年 8 月 9 日（土）　10：00～17：00
場所：広島大学東千田キャンパス

総合司会　辻　祥子
10：00　　開会の辞　塩田　弘　会長

10：05〜12：00　**研究発表（各発表 25 分、質疑 10 分）**

研究発表 1：　10：05〜10：40

山本千尋

「アウトウッドの The Testaments における身体とその消費」（仮）

（司会：岸野英美）

研究発表 2：　10：45〜11：20

澤田由紀子

「3.11 以後の多和田葉子作品の評価を考える――＜亡国＞モチーフの共通性の示すもの」（仮）

（司会：城戸光世）

11：20〜11：30　**休憩**

11：30〜12：40　**特別講演**

講師：伊藤詔子［エコクリティシズム研究学会前会長、広島大学名誉教授］

（司会：塩田　弘）

12：40〜13：10　**総会（昼食可）**

13：10〜14：00　**昼食**

14：00〜17：00　**特別シンポジアム**

【共催】原爆文学研究会、JSPS 科研費 24K00057

アート・コレクティヴ「爆心へ／To Hypocenter」（仮）

登壇者

新井卓氏（アーティスト）

小林エリカ氏（作家、アーティスト）

竹田信平氏（アーティスト）

三上真理子氏（キュレーター）

（司会：松永京子）

17：00　**閉会の辞　中村善雄　副会長**

◇◆◇◆ 各種委員会からのご報告＆お願い ◇◆◇◆

☆（国際）広報委員より☆

会員の出版などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストと HP でお知らせしますので、大野美砂宛て（misa(*)kaiyodai.ac.jp）にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページに掲載する情報がありましたら、ホームページ委員（水野、三重野）までお知らせください。また、ホームページ上の記事のご提案がありましたらお寄せください。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費 4,000 円（学生会員 3,000 円、シニア会員 2,000 円）のご納入を、2025 年 6 月末日までにお願いします。（年会費を 2 年間未納の方は、会員資格を失うことになりますので、ご注意ください。）

4 月 1 日現在で満 66 才以上の方はシニア会員になることができ、会費は 2,000 円になります。ご希望の方は、事務局の岸野英美宛て（hkishino(*)bus.kindai.ac.jp）まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願いいたします。ご寄附については差支えのない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

●住所、所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、ご住所やメールアドレス・ご所属先等に変更があった方は、**レヴューの発送準備等がありますので、早目に岸野英美宛て（hkishino(*)bus.kindai.ac.jp）までご連絡下さい。**

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

編　集　後　記

ニュースレターは今号をもちまして最終号とさせていただくこととなりました。2017 年に前身である「事務局だより」から「ニュースレター」へと名称を変え、第一号がスタートしました。そして初代編集委員の岸野先生、続けて水野先生から引き継ぐ形で、今日に至ります。このニュースレターは研究や仕事の合間にちょっと肩の力を抜いてリラックスして読める、そんなイメージでお届けしてまいりました。今後はレヴューの方に統合され、そちらが情報発信の役割を担うこととなります。末尾にあたりまして、前任の委員の方々に敬意を表するとともに、これまでご寄稿してくださった方々、そしてご愛読くださった方々に心より感謝申し上げます。(G. M.)

この度、編集委員助手を拝命しました。エコクリティシズム関連では、ヘミングウェイやコーマック・マッカーシーなどを主に研究しております。未熟者ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。私が現在生活している高知県佐川町は朝ドラで一躍有名となった植物学者の牧野富太郎博士の出身地として知られております。バイカオウレンが咲く牧野公園は日本の桜名所１００選にもなっておりますので、ぜひお立ち寄りください。(H. M.)

エコクリティシズム・ニュースレター No. 9

会　長　塩田　弘（広島修道大学）
発行元　エコクリティシズム研究学会
事務局　エコクリティシズム研究学会事務局
〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12
愛知学院大学教養部　菅井大地　研究室
dsugai(*)dpc.agu.ac.jp

発行日　2025 年 6 月 1 日
編　集　真野　剛（海上保安大学校）
森兼寛登（広島大学・院）

（スパム防止のためメールアドレスの（*）は@に変えてください。）